

青き誇りプロジェクト

取組に至る背景・事業の目的

青木村は合併せずに自立の道を選んだ。しかし、これからの地域を担う青少年は故郷に誇りを持っているだろうか。

私たちは、大正 10 年から昭和 36 年にかけて村の青年会が村の自治向上を目的に刊行していた「青木時報」に着目した。インターネット等が普及し、いつでもどこでも情報が手に入る今こそ、青木時報のようなアナログで人の温もりが感じられる地域のメディアが必要であると考え、平成版「青木時報」の発刊に至った。また、村の文化財を活用した催しや、村の今と将来について考える場を設け、世代を越えた協働による村づくりを進める。

事業内容

地域を担う若い世代が地域に誇りを持てるようにするために以下の事業を行った。

○「平成版青木時報」の発刊

編集委員会が村の出来事や人にフォーカスをあて、編集し発刊した。内容は青木人（青木村で活動している人）の紹介、気になる青木村のお店や場所の紹介、大正時代の青木時報の記事の紹介など。

7月～3月まで全9号を発刊し、村内の約1,600全戸に無料配布するとともに、村内公共施設やコンビニエンスストア、道の駅等で配布した。

○「文化財の活用 神楽殿サウンドフェス」の開催

村指定文化財で江戸時代に作られたという「回り舞台」のある神楽殿を活用し、太鼓演奏等のイベントを開催した。

・開催日時：平成 26 年 3 月 9 日（日）

・開催場所：宮淵神社（青木村杓掛）

・参加者：約 200 名

○「青木若者会議」の開催

基調講演を聞き、青木村のこれからについて考えるワークショップを開催した。

・開催日時：平成 25 年 9 月 15 日（日）

・開催場所：青木村文化会館

・参加者：約 50 名



【 平成青木時報 】



【 神楽殿サウンドフェス 】

事業効果

平成青木時報の発行により、村の魅力を村内外に発信することができた。

神楽殿サウンドフェスは、約 26 年ぶりに神楽殿を利用したイベントとなり、約 200 名の観客を集めた。文化財の価値を再認識し、また、老若男女が集い交流する貴重な機会となった。

青木若者会議では、村の若者が集い、青木村のこれからについて意見交換をすることにより、様々なアイデアを出し合うことができた。

工夫・苦労した点、課題、今後の取組など

どの事業もはじめての試みであり、手探りで進めてきたが、確かな手ごたえがあった。活動の今後に期待し、応援してくれる方も増えた。今後は、収益性も考慮しつつ、今回の反省を活かし、若い視点とアイデアで多くの方々と協力しながら活動を推進したい。

【選定のポイント】

情報誌「平成青木時報」の発行や、文化財である神楽殿を活用したイベント、地域のことを語り合う「青木若者会議」の開催により、幅広い世代間で村の情報を共有することができ、地域の魅力の再発見・再認識につなげることができた。

団体名 泥百笑（青木村）	事業タイプ ソフト・ハード事業
連絡先 aokijiho@gmail.com	事業費 608,661円
ホームページ http://doro100sho.jimdo.com/	支援金額 439,000円